

911.3

八

上

うねりうねり 舟をくますささり
名もいふことささり ねいささり
た

寛政六年冬

眉山

序

俳諧發句三傑集上

天竺

正月

真一坊車蓋編

兼且

くまをりたさ尺乃巻物 初り札 系文
えりや松志のそりねいうー山、
しうの袖乃大和中ふりりねねの 喘
よろいしねをささりえとりてを乃去、
よのふまき人権くくくねふ
えりやうきささりくくくねふ

孫をけりて孫もさく孫も川島
今孫乃まふお少くおなほはひく
椿より其意乃言れうんきさ孫ま

こくは東西より御乃志ありきとて

系あるも多し——山川崎巖高 系更

殿之乃親六十の賢者

たうみより松よりしんまをきさふ

四十賢 七十賢

考り此約を乃坂口ぬきたりゆ

百とては柳もも何し——お小枝

桂表七十九分

子代傳ふ親を親しむとて一様 嘘ま

水

ま水や孫たき時乃人こは後 夢うた

井ハーツとりのまおろすを親の春

十位乃何くま——定まはにらまう時て

子巻よ入あはんしてまおろす

と木

茶運茶や松ちやとたワしん射

茶運茶を心より涼し——そう方

しん青花を

家うふ乃依えいつてんしんしん厩 草花

福ううや大智花津穂の穂余り

姉とけしやほまむ之しん山 唾壺

遠くもろ母のまてて根文恵し

破魔弓や的のしんまの切豆袋 草花

抱子花ふや落葉ふえ子花波山

正月

正月やみやらの所しん松うき 茶更

正月やし稚らまふふしん高尔

正月や稚らまの所しん木ゆき

萬歳

萬歳やそれしんまき草花

まんまのや稚らまのしん草花

萬歳乃長物まきり夕日

細川

つるひまや稚らまのしん草花

細川やまのしん草花

橋川

鞭えくたししん橋也

所安やうはくは乃の何事 第三
なほい けいり文

兼秀のしつとをいふい 第四

静鈴ハむししく乃は拙文

傀儡河

世の事とをいふしつとをいふ

まのやうな事とをいふしつとをいふ 第五

菽入

菽父入や本殿やかくく之は 第六

菽入は梅子は口よを之は柳危

やぬ入乃二之しつとをいふ 第七

粥杖 縁石

粥杖はし信連屋敷とては 第八

一は梅の影とてはしつとをいふ

五

海陽乃新編すきとては 第九

多端や梅津桂乃しつとをいふ 第十

山うすし海はれしつとをいふ

心まかしてはしつとをいふ 第十一

湖上吟

まゐりつておけりてゐるゝゝゝ
おきてんまてん庭のたよりを
御まゝくまぬたうふ新そと
松うけやまゐりつてゐる
三升ちりつてゐる
押しの画

海をくやんるん初をたう
完末指の三子向すゑ
瀧屋にて梅子餅子たう
さうやまぬ中ぶき
茶文

南草堂電帳

しらりては初はてし朝うと

妻の水

ほろほろお水
まゝお水
妻の水
亡父三十三回

あつたまゝく
難お
を乃ちき

もろくろねをきくや秋のきく下
系文
志瑞や輝かすなりしんふ

白奥

志くろやうきと志く火に清くは
系文

白くはの界をいと遠くは舞か
味文

系文やうき世の志よ目たは
味文

千種

志くろやうきと志く火に清くは
系文

信亦乃系文志くかまうきと志く
味文

子し日

新くや千種うきと志く花乃角

く何子おら抱くくワくふ松と有
系文

志くろは松やうきと志く子のり
系文

系文

疾く清く志く世もいのちおれ
系文

標尺とくおれおら乃志くワれ
系文

志くろは松やうきと志く子のり
系文

下系乃志く世もいのちおれ
系文

松くけりし日と志く花乃角
味文

灯火もさしつゝ梅もさしゆゝ
 家器乃梅を心の丁々梅は志
 梅は志と十日の多々ぬ月夜ど
 之とがーき梅二三日のつら
 けらつき本あさ音々む板戸を
 之ふりて梅も草もあゝ梅のくれ
 河文庫のれりまや梅乃花
 浦乃梅志うらうらふふきり
 つき之くぬりき枝や梅の本
 梅花やささふ燈ふりりり

伏見のささきなり小梅乃蒼れ
 梅乃やつらうらふふきり
 本母より月夜にけり表ありきり
 焚田のさき

柳

梅うさきりくささささり一易極子
 片枝をささきまぬれ柳
 先一本申ぬきれ表乃柳の家
 初ゆつたさな乃柳先まきり
 まむしと柳そゆふさ何りり

春柳やけきも動く〜柱
 若余がまゝのや極乃乾は所
 あは柳やおとしさるる赤葉
 枝のつて夕暮つくふ柳の
 是乃一極の画

清みまも糸口有くやふれが
 垂白きんと吾懸て探くころ土の意不尚
 柳陰より人をそとれ〜時と
 柳より牛の画

呼とま牛の森ありぬ柳の

築帯画

春柳や也〜ぬ時乃〜史髯公
 春極や〜阿まほの能よ〜くま
 遠白や柳一本〜く〜思〜
 阿〜密に山は下ま〜しや〜た〜
 石階や岩乃柳れみ〜色合
 誰蒼る極の申〜子〜
 板平や七石柳み〜
 是の〜や柳〜か〜牛の角
 今〜り〜な〜く〜柳〜本〜の〜川〜

りふハとく物言さる秘くくとも 嘆き

さうおれ世間河くくいりり 紙登川

英さるおれまう入と後りる入めり

うくしすや竹の籠をとり何の種

さうおれはうるまきまき山崎の系

英さるやおのまきおしり夕時守

うくしすと鹿人合まおれ行戸英

朝まーまきのさうくりききさう

さうおれセリとまらや 清宗さ

うくしすとや人やりとく文政乃さ

さうおれ時くかくも家伏屋さ

うくしと火のきほくくとおき他さ

英さる乃時をふたりさくおきか 英さる

さうおれおれ味さうくしりさうりお

まうくおれまやナおれさうくおれさう中

英さるおれまおれまもさうくおれ梢うか

英さる唐やゆりさ遠まおれ陰ま里

さうやまおれしりさうくハ二日月

うくしすや本まさうくさうく京丸山

さうやのまおれさうくおれおれうみ

凡中

切くやふふとやまらや凡中 晴雲

ま川風乃ほほよならぬ凡中

おれは當る程のほほよ凡中 宗文

きれ凡中ほほよほほよほほよ

ほほよほほよほほよほほよ

半橋直下送ふ

橋下より凡中ほほよほほよ

まらし雪 淡雪

降りし雪 淡雪 宗文

残す雪はほほよほほよほほよ

顔色や小神はほほよほほよ

淡雪やまらほほよほほよ

春のほほよほほよほほよ

ほほよほほよほほよほほよ

ほほよほほよほほよほほよ

春のほほよほほよほほよ

雪解

雪とまらほほよほほよほほよ

雪とまらほほよほほよほほよ

くわんやほも種も人の勢
被字

り種とれ被字梅より名もさう

白麻の舞舞

くわんと被字まき子れと定り

涅槃

涅槃今やまきりくふまぬ山

うらむ世より出とも没と稱ん像

出代

出代や飛字并とれく様まら

茶文

茶文

熊野也

おろしやや瘡うとことゆれ

中よりうや左所新しを母れ車

出代やまきりま田乃五人功 味を

糸遊

山と申すのまきりて志り也

当座麻子

甚な成りしと申ふあさひりか

陽光やまきり木橋乃とまきり

うま話と申すはのまきりの月と

味を

茶文

ゆきや中 木やさくく みる戸口ふ 晴
ゆきやこもやさきうは 幸志まきま
うけろふ乃 陰微きふ 晴ふら
琴の字の道なき

かきけろくゆきも 狗もさくくも
ゆきやさくくけりらるゆき乃息
うけけろくや卯のま乃 葉紙の
ゆきや休く 陰の人のうく
かきろくゆきもさくく 陰の
けろ乃 陰もさくく 入白家

うきろくやさきま 瓜畑の
ゆきや 梓のりりり 小北山
あけけろくやさきまのりりり 八里

春雨

まきろくや 小川のりりり 玉柏 年
まきろくや 梓のりりり 小北山
まきろくや 梓のりりり 小北山
まきろくや 梓のりりり 小北山
まきろくや 梓のりりり 小北山

暮るもやゆく寝さるもぬか比に
 流しゆくもや極本に上は附く
 縁く乃秋川や氣ふしの由
 まるもは行積まらぬあき
 しもはさや嘆かきそ本乃雪
 鐘をみよ遠くまなりぬまはる
 妻のあや三人柳向ふ傘乃下
 まるも火もまのあきまはる柳が
 夕陽の御さしゆくまはる比

茶文

晴景

猫のあやまもしんもゆく
 柳のあやまもしんもゆく
 石のあやまもしんもゆく
 猫のあやまもしんもゆく

一ツあ乃猫も鳴かぬまはる
 悲し猫やあまも鳴かぬ
 哀しこのほくもはる
 やけろくして柳も書もあく
 流しゆくもあまも鳴かぬ
 吳んまもく耳すぬあまも

茶文

晴景

茶文

紙板... 一... 一... 一... 一...

花子漢

... 一... 一... 一... 一... 一... 一... 一...

... 一... 一... 一... 一...

紅毒

... 一... 一...

椿

... 一... 一...

三ツ折まじしニツいらつめりたむ極
燧形 すすほの房 草を

杉のや燧形乃きまこの松の月

かりりや燧形すいれりまじり 燧を

川燧をきれそくあふ燧形 燧を

新風やすくろれとたてく初を

草

匍匐やみぬすれたを記つる

むし甲の信り草をすいれ草

しりくきさの世有り草を

蔓橘をらふまき妻のけり後 燧を

紐落く草をむすいれ草

杉く山や人住何まそすみ草

行乃を草をむすいれ草

草

川を曲や草をむすいれ草 燧を

ちんちんめえ小孫り草をむすいれ草 燧を

新風やすくろれとたてく初を

草

草をむすいれ草をむすいれ草

葉はくまや南風ふれくまは
 なるもくしそ赤き大和何由が
 なはつる乃やまといふまはた
 葉のちもや花より北の飯成
 ぶはまやふらば隈すもつま
 ね乃花や西山何れ夕陽日
 葉はくま乃赤戸をほろふちが
 なるつれくし白女乃戸出た
 轍くまはくま乃赤りくまは
 くのまはくまはくまのまはくま

葉を

葉文

味を

葉はくま乃くまはくまはくまは
 なるくまはくまはくまはくまは

知子 四子

葉はくま乃くまはくまはくまは
 知子や呼呼吸乃まはくまは
 葉はくま乃くまはくまはくまは
 葉はくま乃くまはくまはくまは

蕨

葉はくま乃くまはくまはくまは
 葉はくま乃くまはくまはくまは
 葉はくま乃くまはくまはくまは

味を

葉を

葉文

くわい梅

初花

そらちやを花さす乃花深き

味

甲と巻してゆり阿いささく梅

汝も花をゆり梅ふくくすきん

初花のや先花もよく花を花院

花

山乃花のさし枝ゆりゆり梅

香梅より梅はく

きりゆりゆり阿さう花の初さく

一日と花ゆりゆりゆりゆりゆり

花

りと梅ゆりゆりゆりゆりゆり

三十一

梅

花は花と花乃古床ゆりや 味

花と花ゆりゆりゆり梅花梅ゆり

むり花ゆり花本と花ゆりゆり

花ゆりゆりゆりゆり花乃白ゆり

川と花ゆりゆりゆり花ゆりゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

花ゆり花梅ゆりゆりゆりゆり

花ゆりゆりゆりゆりゆりゆり山

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

花

夕干

干の如く夕や馬まきとてしるべきは葉
三月乃は波とて入ふ三〇のれ
糸文

梳し玉

梳の如くしるは髪をさしけしり
誘ふまゝしるは華よきぬまゝしるは
昔の戸の乃りしるはぬまゝしるは

伏ふ少く

梳つしるは髪をさしけしり
神垣より梳ふは里にありきと
啼き玉

八十髪

梳柳の十しるはと馬かうん

阿の人の髪よ

けしるは髪や梳ふは髪すふ眉は
糸文

六十髪

初髪を梳ふは母の髪を梳ふ
啼き玉

手は梳ふは里志のりしるは
糸文

髪を梳ふは髪を梳ふは
糸文

里人や梳ふは髪を梳ふは
糸文

梳ふは髪を梳ふは

つらき乃道里わら川 柳あけく 花をよ

上

月ふりふまをともたりーと花を 曉を

鳥城乃すはる小ぶるさる白花

やまのけいふ

やまのけいふのまをまねふ時なりけり

まをまねふまをまねふまをまねふ 系文

花

さうらぬまをまねふまをまねふ 暮を

はく乃乃ちまをまねふまをまねふ 風

飛き山

二のまをまねふまをまねふ 花をまねふ

帆うけ舟なりまをまねふ 花をまねふ

まをまねふまをまねふ 花をまねふ

まをまねふまをまねふ 花をまねふ

サ方野

何のまをまねふまをまねふ 花をまねふ

いふハサぬ所の白まをまねふ 花をまねふ

まをまねふまをまねふ 花をまねふ

鳥宿山

むきやきしはさうあく馬場山 夢を
眠るは夢遊

山は夢遊 夢遊山 夢遊山
三十五世撰

くまーいりまきり鳥を

嵐書忘取紙

山は夢遊 夢遊山 夢遊山

山は夢遊 夢遊山 夢遊山

山は夢遊 夢遊山 夢遊山

鴨乃しは夢遊山 夢遊山 夢遊山

山は夢遊 夢遊山 夢遊山

山は夢遊 夢遊山 夢遊山

山は夢遊 夢遊山 夢遊山

山は夢遊

山は夢遊 夢遊山 夢遊山

山は夢遊 夢遊山 夢遊山

山は夢遊 夢遊山 夢遊山

山は夢遊 夢遊山 夢遊山

山は夢遊

山は夢遊 夢遊山 夢遊山

ゆきし家のやうにゆく

あま根よりあまふ人の話とねを

晴玉

双玉懐旧

あまとあまをわきと構乃うけ二之

清くゆく

ひらけ飛ひのらふたれうけあまを 糸文

あまをこむらむと構乃うけ二之

山信やあまを構乃うけ二之

縁をこむらむと構乃うけ二之

御座一用忘

三十五

兼乃山や

一玉あまをれあまををこむらむ

あまを根よりあまふ人の話とねを

あまを根よりあまふ人の話とねを

あまを根より

あまを根よりあまふ人の話とねを

あまを根よりあまふ人の話とねを

あまを根よりあまふ人の話とねを

あまを根よりあまふ人の話とねを

あまを根よりあまふ人の話とねを

花好んくさきよひつり山崎の如 第廿一

あはれあしきくさるるふさふさの枝さく

上層乃噴ふ花好あしきく

梅

春梅や三味線をひくく人通る 夢

世に申ハ二日とわぬ中梅の香

東慶山六白

さしき子ふさふさの枝さく

ささくさく噴ふ節りやんふを門

初節り言井さくさくさくさく

乃之とさくさくさく枝形有太阿

海而く阿さたさくさく浄子也

人さくさくさく雅集れ日暮ふ

申さ梅初さくさく枝形有太阿

さくさくさくさくさくさくさく

より節度

山くさくさくさくさくさくさく

うけすしやさくさくさくさくさく

及山や梅初さくさくさくさく

於席時ハ伊勢とさくさくさく

花のよきしは少くあは伊勢の橋
赤くつゝまゝに流るゝ之ものや夕橋
那願は禁

日向山阿るまあけ橋さたすまゝと
妻もも三月とらめと路もあは訪ひ侍
まゝに梁草抄かん教乃阿るまゝと
阿るまゝと阿るまゝと阿るまゝと
西も阿るまゝと阿るまゝと阿るまゝと
日向山阿るまゝと阿るまゝと阿るまゝと
阿るまゝと阿るまゝと阿るまゝと

下砂やささく我抱く月影暈
断思

阿るまゝと阿るまゝと阿るまゝと
游名歌

上も阿るまゝと阿るまゝと阿るまゝと
比巴里

伊勢(と)さたきりまゝと阿るまゝと
阿るまゝと阿るまゝと阿るまゝと
阿るまゝと阿るまゝと阿るまゝと
阿るまゝと阿るまゝと阿るまゝと

さくく 枝まき 寺に 女部 一 葉
山く 也 高 子 根 毛 一 枝 乃 先
馬 子 一 葉 老 好 遊 毛 一 枝 乃 先
枝 毛 一 葉 老 好 遊 毛 一 枝 乃 先

海棠

海棠 也 枝 毛 一 葉 老 好 遊 毛 一 枝 乃 先
海棠 也 枝 毛 一 葉 老 好 遊 毛 一 枝 乃 先
海棠 也 枝 毛 一 葉 老 好 遊 毛 一 枝 乃 先
海棠 也 枝 毛 一 葉 老 好 遊 毛 一 枝 乃 先

梨花

梨花 也 枝 毛 一 葉 老 好 遊 毛 一 枝 乃 先
梨花 也 枝 毛 一 葉 老 好 遊 毛 一 枝 乃 先
梨花 也 枝 毛 一 葉 老 好 遊 毛 一 枝 乃 先
梨花 也 枝 毛 一 葉 老 好 遊 毛 一 枝 乃 先

山吹

山吹 也 枝 毛 一 葉 老 好 遊 毛 一 枝 乃 先
山吹 也 枝 毛 一 葉 老 好 遊 毛 一 枝 乃 先
山吹 也 枝 毛 一 葉 老 好 遊 毛 一 枝 乃 先
山吹 也 枝 毛 一 葉 老 好 遊 毛 一 枝 乃 先

ふれり山吹さきさきしに遊もが
山吹の山吹さきさきしに遊もが
たふり山吹さきさきしに遊もが
山吹さきさきしに遊もが
やいぬれやむさきさきしに遊もが

茶

なまきさきさきしに遊もが
つゝさきさきしに遊もが
さきさきしに遊もが

永日

修徳りりたりさきさきしに遊もが
永きりやふ二の裾り糸の糸
まきさき

さきさきしに遊もが
はゆりさきさきしに遊もが
さきさきしに遊もが
風まきさきしに遊もが
さきさきしに遊もが
阿まきさきしに遊もが

四月

文衣

初袷

白重

一とらうまの袷 梅ふらうり文衣 果文
 袷まろくつはかりまろくつまろくつ
 麻くくはまろくつはかりまろくつ袷が
 正まろくつや何とまろくつはかり文衣
 袷一ツ出うけまろくつはかりまろくつ
 正まろくつはかりまろくつはかりまろくつ
 正まろくつはかりまろくつはかり文衣

鞠子

吹ひたつてくくつはかりまろくつ文衣
 正まろくつはかりまろくつはかりまろくつ
 鞠子まろくつはかりまろくつはかりまろくつ
 文衣まろくつはかりまろくつはかりまろくつ
 袷買まろくつはかりまろくつはかりまろくつ
 正のまろくつはかりまろくつはかりまろくつ
 正まろくつはかりまろくつはかりまろくつ

玉川と紙子日

玉川乃波うまろくつはかりまろくつ
 時子

表赤竹の如くして、
不文

かゝるきし、
、

ほゞ、
、

時、
、

柱、
、

子、
、

月、
、

閑居多

疎、
、

里、
、

太、
、

竹、
、

家、
、

葉、
、

何、
、

中

第、
、

く、
、

か、
、

歌

地蔵の合の形を茶子の茶の茶の
 中々茶の茶の茶の茶の茶の茶の
 子茶の茶の茶の茶の茶の茶の
 うま茶の茶の茶の茶の茶の茶の
 茶の茶の茶の茶の茶の茶の

茶の茶の

白茶子の茶の茶の茶の茶の茶の
 茶の茶の茶の茶の茶の茶の
 茶の茶の茶の茶の茶の茶の
 茶の茶の茶の茶の茶の茶の
 茶の茶の茶の茶の茶の茶の

杜若

茶の茶の茶の茶の茶の茶の
 茶の茶の茶の茶の茶の茶の
 茶の茶の茶の茶の茶の茶の
 茶の茶の茶の茶の茶の茶の
 茶の茶の茶の茶の茶の茶の
 茶の茶の茶の茶の茶の茶の
 茶の茶の茶の茶の茶の茶の
 茶の茶の茶の茶の茶の茶の
 茶の茶の茶の茶の茶の茶の
 茶の茶の茶の茶の茶の茶の
 茶の茶の茶の茶の茶の茶の

茶の茶の茶の茶の茶の茶の
 茶の茶の茶の茶の茶の茶の
 茶の茶の茶の茶の茶の茶の
 茶の茶の茶の茶の茶の茶の
 茶の茶の茶の茶の茶の茶の

蕙子とむ穂まの敷りりまはし
むしー女乃とむか〜作と杜ま
ワ〜も〜やと〜も〜り杜ま
す〜る〜と〜の〜〜〜

芍薬

芍薬也〜と〜の〜の〜
志中〜や〜小瘡す〜る〜
梅手止人〜

芍薬と薬子乃〜

麦

麦の穂やと食粒〜
むき枯〜五席〜
きり〜中〜

夏草

夏草や〜
望〜く〜
り〜

草

草

下〜乃〜下〜の〜
〜
〜

りしつぎく嘆けりしとく主筆
年文

美竹 作し子

年形や竹の子時乃信後便
嘆き

美竹八月をたすきききき

美竹子や一帯りしつぐん

美竹や一字に灯消し
若き

美竹やをちりし里に男きき

竹の子やあしにきききき

老懐

ほろろきききききき
、

のり布や今もあしきききき
年文

美竹や月夜にきききき

卯之巻

美竹ころり佛もあしきき

し乃とあしはのりききき

美竹をきききききき
嘆き

美竹をれ乃中りききき

山あしききき

し乃とあしはのりききき

新梅

若葉

言はれぬく是華志月、細白、英志
西水、雲州、画、

楠乃、うら、後、ハ、七、ク、
瀬、ま、か、り、の、阿、沙、を、あ、る、ま、ふ、
花、七、の、蔭、葉、の、中、に、あ、る、葉、利、
人、婦、々、々、軟、富、あ、る、新、樹、う、ち、
美、葉、の、一、し、浮、世、の、心、を、う、ら、
美、葉、山、佛、の、心、を、う、ら、
る、葉、の、心、を、う、ら、
る、葉、の、心、を、う、ら、

葉様 砂花

葉、の、心、を、う、ら、

戸、の、心、を、う、ら、

夏木之

入、る、心、を、う、ら、

う、ら、る、心、を、う、ら、

言、は、れ、ぬ、心、を、う、ら、

雪、の、心、を、う、ら、

金銀志

尺、の、心、を、う、ら、

みらねく、越家くよ

さしくやまねく、と重限を、暮る

松魚

一りを芝をりく、のり、

之く月、一、越、さ、く、

白魚、乃、之、初、り、

板、乃、乃、之、初、り、

又、く、乃、乃、之、初、り、

初、松、魚、乃、乃、之、初、り、

余更

經表

松念乃、乃、乃、乃、

乃、乃、乃、乃、

人、乃、乃、乃、乃、

乃、乃、乃、乃、

乃、乃、乃、乃、

乃、乃、乃、乃、

乃、乃、乃、乃、

灌佛

乃、乃、乃、乃、

味表

清仙やきうら茶子ふ柳陰 葉を
花津をつるも茶も何れも

一夏

明乃故の落きもぬ僅乃ら
くりせ山一夏清く病淨あしん 嘯を

春巻

何れ故や月もららるる春何れ
をまらぬ本もふらち一夏と巻 葉を

新神

葛の枝も茶吹やうらり巻を 嘯を

る二りもや何れも芽生ふ 葉を

おららるる松陰うらむ落ふ 葉を

一柱はくもいもは花柳の形 葉を

みもらうらうらるるふあし山 嘯を

葉を追ふう落や春の芽野と

葉茶くく音かきあきと響ぬる

五月

瑞々 常春藤ゆ 葉を

十葉に新やうらこ乃何やえく 葉を

妹のうらや 階子竹のさかふ 草の蒲の目 糸文
 あり 袖ふあや ちと 新小てりり 矢
 家世も ぬくこり 下りり 草の蒲の目
 海ふく 何や ちと 新 階子竹
 玉あり 草の蒲の目 ぬくこり
 ぬくこり 川ワの ぬくこり 草の蒲の目
 草の蒲の目 漢まの 階子竹 ぬくこり
 ちと ぬくこり 妹のうらや ちと ぬくこり
 玉の草の蒲の目 ぬくこり ちと ぬくこり
 階子竹 ちと ぬくこり

うの ちと や ぬくこり ぬくこり ぬくこり
 一 所 ぬくこり ぬくこり ぬくこり

草の蒲の目 ぬくこり ぬくこり ぬくこり
 ちと ぬくこり ぬくこり ぬくこり

甲 柏餅
 ちと ぬくこり ぬくこり ぬくこり
 ぬくこり ぬくこり ぬくこり ぬくこり

つと世を志、備ふうしむか
つりい子ばふふふ何ぞは相い
餅ううううううううううう
くく馬

くく馬落しはくくくくく
くくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくく

竹解

竹極く極く極く極く極く極く
竹極く極く極く極く極く極く
竹極く極く極く極く極く極く

糸極く極く極く極く極く極く
糸極く極く極く極く極く極く

鼻月鏡 百草証

花女

花女女女女女女女女女女女

七千も老物とかなすねも又うすいふもや

ふふふふふふふふふふふふ

帽子 草物 夏物

軽くと老うかうかうかや夏物

軽きと老うかうかうか

清平丸 草物

五七五 五七五 五七五
入 入 入
入 入 入

牛

牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛

牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛

牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛

牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛

牛

牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛

牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛

牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛

牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛

牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛

牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛

牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛

牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛

牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛

牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛

牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛

出むうやうぬりしんまきうふ
 る受くうまふ乃そのれゆり
 やうまうぬまき我やうぬまうぬ
 文りや管城はまうし所れ中
 うかしのりれさうりはまき
 有難

けすくほりしりぬれ遠き
 文りし人きすまきぬれ
 米ま母やぬかしくまきぬれ
 古ぬや松乃ぬりしぬれ

ぬしふゆりぬれさうり
 本母まきとまきしたくぬれ
 蒲田外くぬれ遠き麻定が
 ぬれぬりぬれぬれぬれぬれ
 系度ぬれはぬれぬれぬれ
 鹿子

小甲麻子子ぬれぬれぬれ
 出りや荒のまきぬれぬれ

四柱

四柱女乃轉ひてぬれぬれ

世もゆきや 椽もたれも 後をたれ
 何もなきや 下れを故の 時をたれ
 あらうきの りわたりし 村をたれ
 けまゆきや 下れを 乃 けりし 時をたれ
 世もゆきや 下れを 乃 けりし 時をたれ
 あらうきの や 下れを 乃 けりし 時をたれ
 若乃 花

凡

凡くもく 椽もたれも 後をたれ
 多もなきや 下れを 故の 時をたれ
 凡くもく や 下れを 乃 けりし 時をたれ
 多もなきや 下れを 乃 けりし 時をたれ
 下れを 乃 けりし 時をたれ
 下れを 乃 けりし 時をたれ
 下れを 乃 けりし 時をたれ
 下れを 乃 けりし 時をたれ

岸

下れを 乃 けりし 時をたれ
 下れを 乃 けりし 時をたれ
 下れを 乃 けりし 時をたれ

杏子 李子

まろくそんごふて味ふ杏子うめ 英うそ
杏子や佳ゆふく日かぬく交互 味ふそ

柳乃志

鶴つらりほつふつや柳乃志

志賀の山ふりて

志賀の山ふりて

柳

世より糸子らるるくとも柳

菰野の又ききるたてりて柳

百り紅

ふりぬ先四よりとるりて 英うそ

百り紅解つりてみりて 英うそ

柳川

人毛柳もつりてきたりて 英うそ

けくももつりてきたりて 英うそ

家とく柳紅もつりてきたりて 英うそ

ふ一町柳紅もつりてきたりて 英うそ

とるりて柳紅もつりてきたりて 英うそ

けくももつりてきたりて 英うそ

五ねとくえす相くしゆふさ川橋が

草子

鯨

夕風や汐みちをぬき小鯨を
 甲子鯨や波うらまきりき
 夕鯨やとぬれ鯨名記の磯
 まく月
 雲くまきり竹よとくくま月
 何ともおれ魚けまうや友の月
 かりけり漁のまよふすこの月
 掃りり月をまむしん夏ま月

六十

新

よふ晴や竹平らとくり乃鯨
 松杉舟やまほきくうま山
 千のいなくま山ま成るわが
 白山

雷争るは是何とせしうらまの言
 夕風や汐みちをぬき小鯨を
 甲子鯨や波うらまきりき
 夕鯨やとぬれ鯨名記の磯
 まく月
 雲くまきり竹よとくくま月
 何ともおれ魚けまうや友の月
 かりけり漁のまよふすこの月
 掃りり月をまむしん夏ま月

晴

白濁の如き書にては此の如く一巻毎
に書きし能乃其の如く一巻毎
の如くは読むかきし如くは書きし
味も

赤穂

茶の酒よ月夜をく赤穂食 暮るる

秋白坊の道系

赤穂の十六の女は其の途に如く

中拂 七月中

中干や我妻をくくくや吟ん

心はくやとては書きし如くは小袖

祇園寺の梅並み

中干やとては書きし如くは小袖
中干やとては書きし如くは小袖
中干やとては書きし如くは小袖

山あがりには風をくくくは錦 味も

月夜中の人をくくくは山をくく

汗拭くは梅をくくくは思の如く 暮るる

白濁

夕べの如くは梅をくくくは山をくく

中干やとては書きし如くは小袖

中干やとては書きし如くは小袖

夕之や...
 自由也...
 白る也...
 言し...
 久し...
 時...
 目暑

涼
 火口ホクナ揚白乃...
 大は...
 舟一涼...

丈芝...
 既赤...

涼しきや腮きけけり夕さるる
味も出

け刺す涼しき朝おきまふに
、

涼しきも明り月夜に
、

けさか子も乳の毛をぬく夕涼
、

すしきや十日暮れとすも松の風
暮も

多枝戸や柳更しとすす
、

涼しきやさる仕立ぬるふ丹桂京
、

加田書泊

蟹も出く申有とさしや申下涼
、

布衣節上渡

夏結乃涼行とく月涼
、

埋ありて何れもふさむ生し渡す

涼しきや何れ生とくもさる
、

成竹は涼しき美とく風涼
一糸更

下涼も月さるる夕木は涼を
、

夕すき夕涼しき夕も文り
、

けもんとく静もゆい夕す
、

すしきやさるもすしき竹中
、

涼風やとりぬすし生弱山
、

世まじりすしきもさる人涼も

夕す片楸乃そくそ雅多うけ家
砂川や楸のちりき申すすん
す風や夏に白根成竹乃上
風葉

留あ
風葉ふふとや手取花弁の裏

竹婦人 葉
風葉ふふとくし病くはあ

香山すれ僅似公一やうし後
詩人似公ふりやんくく人葉
葉
六十五

葉すもやも拭うけし竹丈人
七葉ふふとこ之竹そそいん竹婦人
合而りト人似くまん竹婦人
標まきく馬うろくしりく竹婦人
字治後乃呈授うき川弁婦人

園 扇

涼しき花あまぬの侍若葉ふふと
是竹乃伏し御出さうすんり
葉

夕 葉
甲子麻花若や門田乃御侍
葉

夕鳥や妹をさるるはるやあつらふ

中ふれやむしりかひをひらき

夕うほや何うううううううううう

ゆふれ乃を成るるや木を成る

夕うほやむしりかひをひらき

夕鳥や妹をさるるはるやあつらふ

中ふれやむしりかひをひらき

合歌

しらわつと長紅のりたる合歌の歌

合歌の歌や柳の垣乃定むる

蓮

蓮花の多や茶のうま百朱のうま

花はみまつほくく月乃葉のうま

蓮花の多や茶のうま百朱のうま

蓮生くも波は成り乃葉のうま

蓮花の多や茶のうま百朱のうま

蓮花の多や茶のうま百朱のうま

蓮花の多や茶のうま百朱のうま

麻

大友四角よりなるなりなり
社父はまゝ乃と立方格や麻地極
麻よりや白髪江の赤くさる
すむくと世へ明年一庵とつけ

清水 泉

縁とく夏山陰乃つり人象
山儀乃高や何くも苦志
おれ解を糸信とく清くさる
あふ修を法とく清くさる
言柄抄乃揚とく清くさる



若清水

沿く志を命にかふ之けきみ川
味

沖鯨

沖たすんてまゝなつてなす
許人乃凱陣とく清くさる

蟬

つとくと蟬よりさる川柳文
とくり蟬や初春乃雪の縁より
岸とく山崎とく清くさる
蟬とく楮乃蛙とくさる

中内

押付書も若さうしき生(宣六) 第5
さし汐や押乃鳴さし浪櫓
けり櫓や音きれぬの波辺の杭

田形さうや押乃幸あはる礎裏

くさしきり体たへ船形さうき

安達原

馬場や中旅人をむしき 晴玉

輓

夕暮乃をさしきれよ表乃輓

有月

夜半をさしきれよ中内輓乃呈
輓さうしきの先成しきりさうき
輓亦や志しき宿きるさうき
夜半をさしきれよ中内輓乃呈

子さしきれよさうきと風乃好く表乃

水さしきれよさうきと風乃好く表乃

津橋

夕暮をさしきれよ津橋乃好く表乃

遠くけりさうきと風乃好く表乃

研書

研書

研書

研書

研書

俳諧發句三傑集上 終

3.14
3
深きくむりまなまきふりし
六月と夕暮るあけ三井乃後
まらけまきまきまなれ玉川
陰海松乃夕暮るまらけまき
味香

雑

みくらまなれまなれまなれ川
瓜又まらけまらけ遠すのまの静か
まらけ



